

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

2016年度 FICオープンセミナー企画

著者	法政大学 国際文化学部
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	18
ページ	167-182
発行年	2017-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/13161

「映画『クリーピー 偽りの隣人』 公開記念試写会&トークイベント」報告

前川 裕

6月6日(月)、FICオープンセミナーとして教授会で承認された「映画『クリーピー 偽りの隣人』公開記念試写会&トークイベント」が開催されたので、企画責任者として簡単に報告させていただく。

会場の薩埵ホールには本学学生を主体とした600名近い観客が詰めかけ、盛況となった。私がこのイベントを企画させていただいたのは、黒沢清監督の『クリーピー 偽りの隣人』は、拙著『クリーピー』(光文社文庫)を原作とする映画であり、「小説と映像」というテーマで講義を行う教員も少なくない我が学部において、学生に対する教育的効果を期待できると考えたからである。また、学部宣伝にも多少とも寄与できるだろうという判断があった。

この点については、榎木玲子学部長が冒頭挨拶で、国際文化学部の教育・研究内容と今回の企画がどう結びつくのかという視点から丁寧に説明された。この企画は、言語文化コースや表象文化コースが存在する我が学部にとって、外部に対して情報発信を行い、学部宣伝の好機となるだけでなく、学生がこれを機に教育的学問的刺激を受けることを期待する趣旨の発言があった。

続いて、コメンテーターとして岡村民夫教授が黒沢監督の映画について、アカデミックかつ興味深い解説を提示された。黒沢監督は2015年、『岸辺の旅』で第68回カンヌ国際映画祭「ある視点部門」の監督賞を受賞しており、その他の作品でも広く世界に知られ、非常に評価の高い監督である。岡村氏はその作品の特徴を、(移動の方向と建物の構造などの)ある種の映像的矛盾に求め、意図的に作られた矛盾が持つ意味について、精緻な解説を加えられた。このことは、本映画の中でも、西野家およびその周辺の家の構造にも当てはまっており、岡村氏の指摘はこれから映画を観ようとしていた学生たちにとって、大変参考になるものだったと推察される。ただ残念だったのは、上映時間の関係で、岡村氏にそれ以上詳細な解説をしていただく時間が与えられなかったことであり、その意味では企画責任者として申し訳なく思っている。映画は二時間十分でかなり長いため、開始時間を早めて解説にもっと多くの時間を割くことも考えたが、できるだけ授業に対する影響を少なくするためそれも難しかったことを付け加えておく。

そのあと、上映が開始されたが、私はゲストの方々をお迎えするために席を外し、映画は観ていない。従って、薩埵ホールのスクリーンや音響効果の実際については、どうか判断できる立場にはない。もちろん、薩埵ホールはもっぱら映画上映用に作られたわけではないから、専門の映画上映館に等しいスクリーンや音効強化を期待するのは無理だろうが、実際にご覧になった先生方の話では特に大きな支障もなかったようである。

映画終了後、ゲストの黒沢監督と私が登壇し、司会者の質問に答えた。映像と原作の違いについて感想を訊かれ、私は「原作と映像が違うのは、表現媒体が異なる以上当然であり、優れた監督は、原作をうまく切り取って、その作品のエキスだけを残すものだ」という趣

旨の発言をした。この種の質問は、私自身はいくつかのメディアから既に何回か受けており、そういう質問の根底にあるものは、小説と映画の筋立てが相当に改変されていることに対する、原作者の心境を探りだそうとするものであろう。ただ、原作者の立場から映像を見ると、むしろ、黒沢監督が原作の雰囲気映像的に巧みに処理して伝えてくれている部分も多く、私はその意味では満足している。

黒沢監督は長編小説を映画の尺に置き直す際の難しさを語り、映画監督として小説を実写化する際の視点の置き所について示唆に富んだ発言をされた。西野家と近隣の家配置に注目し、探していた犯人が隣に住んでいたという逆説に興味を持ったというのは、いかにも映像作家らしい視点である。だが、映画監督と小説家という立場の違いはあっても、互いに共通する視点は普遍的であることも痛感した。

ここまでのトークは、上映前の岡村氏の解説にも通じるものがあり、ある種のアカデミックな雰囲気が維持されていたように思うが、このあとのサプライズゲストの登場で雰囲気は一変した。西島秀俊さんと竹内結子さんが登壇すると、会場は騒然となり、嵐のような拍手と歓声が沸き起こった。これは私としては想定内の出来事で、多くの学生が喜び、楽しんでくれたのだから、これはこれでよかったと思っている。小説はおろか、映画でさえも少しでも芸術性が高いとなかなか興味を持てることが少ない昨今、関心のきっかけとして、こういう演出を一概に否定することはできないだろう。

ただ、構成の仕方としては、黒沢監督と私のトークは、むしろ上映前に持って行き、岡村氏の解説と結びつける手はあったような気はしている。そうすればメリハリができ、上映後のトークは、まさに娯楽のトークショーと割り切ることができたかも知れない。いずれにせよ、和気藹々とした雰囲気の中で、西島さんと竹内さんに対する学生からの質疑応答が行われ、最後はホットセッションでこのイベントはつつがなく終了した。

私自身、これほど大きなイベントを企画するのは初めてだったので、慣れないことも多く、反省点も少なくない。学生の募集の仕方もどうしたものか迷っていたが、島田主任を始めとする事務の方々の全面的なバックアップのおかげで何とか、多くの学生や教職員の参加を実現できた。登録なしにやってきて入れなかった学生はごく少数いたようであるが、その他、会場における大きな混乱はなかった。会場整理や受付に従事していただいた事務の方々や学生諸君に、ここに改めて感謝申し上げたい。それから、もちろんのこと、この企画を承認し、協力してくれた企画広報委員の方々や教授会メンバーの全員にも、心からの感謝を捧げさせていただく。



満蒙開拓の歴史から受け継ぐもの —歌集『伊那の谷びと』の小林勝人さんに聞く

SJ 委員会（高柳俊男）

法政大学国際文化学部では、留学生に日本を多面的に認識してもらうことを主目的に、2012 年度から長野県南部の飯田・下伊那地方で 8 日程度の「SJ（スタディ・ジャパン）国内研修」を実施している。

SJ 国内研修では、この地域の外国や異民族との関係史や、国際化の現状・展望などが学ぶべき主要課題だが、当地から多数の住民が渡って行った満蒙開拓もその中の重要テーマの一つである。

研修のなかで例年お世話になっている小林勝人さん（歌会始入選者）が 2015 年、歌集『伊那の谷びと』を上梓した。飯田日中友好協会や満蒙開拓平和記念館に関わってきた経歴を反映して、満蒙開拓や中国帰国者について詠んだ歌が全編を貫いている。ほかに、伊那谷全域への関心を育むことになった中部電力社員時代の保守点検業務や、家庭での養蚕・製糸の歴史、そして過疎化や学校の統廃合が進む現状への懸念など、伊那谷にとって貴重な近代史の経験が多数散りばめられている。

そこで、小林さんの歌を媒介に、満蒙開拓や中国帰国者、さらには伊那谷の来し方行く末を考える催しを 2016 年 3 月、地元南信州の阿智村で開催した。それを受けて今回、小林勝人さんを東京にお招きして、法政大学でも同趣旨のセミナーを開いた。

セミナーではまず、法政大学国際文化学部が進める SJ 国内研修について、概要を簡単に説明した。その上で、歌集に収録された 500 首ちかい歌を、「満蒙開拓」「中国への侵略・中国人強制連行や日中友好運動」「中部電力での業務」「伊那谷の生活全般」「過疎化や学校統廃合への憂いと伊那谷の未来」など、テーマにより 7 つに大別し、それぞれの代表作についてそこに込めた作者の想いや背景を伺った。満蒙開拓という「負の歴史」を直視し、それをプラスへ変えようと努める姿勢が、全体から見て取れた。この「負の歴史」からいかに学ぶかというテーマは、学部の SJ 国内研修における学びの最重要項目であり、示唆的だった。また、小林さんの継続する意志と謙虚な人柄も印象的だった。

会場には、学内では、この秋に SJ に行く 2 年次の留学生、かつて SJ に参加し、小林さんとも現地で交流した 3 年次の留学生、SJ には行かないがいま事前学習授業を受講中の日本人学生、および他学部教員が足を運んでくれた（学部所属教員の参加は無し）。また学外では、いつもの在京飯田高校同窓会メンバー、講師と同郷の高森町出身者、中国残留孤児や中国帰国者関連の人たち、短歌関係者などの参加があった。計 40 人ほどの参加者の約 7 割が懇親会まで残ってくださり、講師と各参加者間で有意義な意見交換や情報交換を行う場となった。

なお、その後の11月、天皇皇后が私的な旅行で、小林勝人さんも主要メンバーの一人である満蒙開拓平和記念館（阿智村）を訪問し、満蒙開拓体験者3名と懇談する出来事があった。その際、長野県の地方紙「信濃毎日新聞」は一面トップをはじめ全5頁を割き、今回の南信州訪問、とくに満蒙開拓平和記念館を訪れ体験者と語り合ったことの意味を、「歴史考える新たな出発点」として掘り下げて報道した。全国紙の扱いとの落差は明白で、この満蒙開拓の歴史が長野県にとってもつ意味の重大さをあらためて語るようであった。

そうした点からも、「国際」と「文化」の接点に位置するこの企画は、国際文化学部学びとして時宜を得たものだったと言えるかもしれない。

<歌集から>

- ・牛がせしその温き糞に裸足を入れ冬の満洲生き延びし孤児
- ・ふたつの国ふたりの母を語り呉れる卒寿過ぎたる帰国婦人は
- ・二十七万人が入植したる「満洲図」に土地奪はれし人重ね見る
- ・「侵略」の片棒と識らず渡満せし伊那谷いまや放棄田広がる
- ・村を分け新天地へと渡満させし母村も合併の波に吞まれる
- ・この事実いまの児たちに話さねばならぬと語り部杖つきて来る

-
- 日時：2016年7月9日（土）15:00～18:00
 - 会場：市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 3階 0300 教室
 - 内容：歌集『伊那の谷びと』を出版した小林勝人さんの語り
（聞き手：SJ 国内研修担当教員 高柳俊男）
-



辻英之氏講演「持続可能な地域創生と『人づくり』の課題～田舎・在所の教育力～」

SJ 委員会（島野智之、高柳俊男）

島野が担当する授業に、NPO グリーンウッド自然体験教育センター代表理事の辻英之さんをお迎えして、講義と交流の場をもった。この機会を利用して、辻英之さんらが長野県下伊那郡泰阜村を舞台に展開している山村留学や自然体験教室などの実践について、より多くの人に知っていただくことを目的に、このセミナーを開催した。

NPO グリーンウッド自然体験教育センターは、30 年に及ぶ着実な実践を経て泰阜村に溶け込み、いまや村になくてはならない存在となった。しかし、当初はいわゆる「問題児」の流入で村の子供たちが悪影響を受けるのではないかという懸念や、よそ者への警戒心が強く、すんなりと受け入れられたわけではない。これに対して、道普請やお祭りなどの村の行事に欠かさず参加して信用を得たり、地道な実践活動を積み重ねる中で、徐々に信頼関係が築かれていった。その過程が、多くのスライドやエピソードによって印象的に語られた。

同センターの継続する活動により、かつての山村留学生ないしキャンプ経験者がまた村に戻ってくるなど、「人づくり」が着実に成果を生んでおり、それが持続可能な地域づくりに役立っている。この点も注目される。

今年度の SJ 国内研修では、この NPO を訪れて宿泊し、山村留学中の児童・生徒たちと海外からの留学生が交流を行う予定になっている。そこで、SJ 事前学習授業「世界とつながる地域の歴史と文化」においてチラシを配付し、SJ 参加予定者は可能な限り出席するよう促したが、あいにく参加者はいなかった。

その他も含めて、主催者以外の参加者はごくわずかだったが、その分、少数精鋭で意見交換や交流を行う得がたい機会となった。

-
- 日時：2016 年 6 月 22 日（水）15:20 ～ 16:40
 - 会場：市ヶ谷キャンパス 富士見坂校舎 F407 教室
 - 内容：辻英之氏（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事）
「持続可能な地域創生と『人づくり』の課題～田舎・在所の教育力～」
-

ハイブリッドアニメーション 『はちみつ色のユン』－映画上映と学際トーク

高柳俊男＋廣松勲＋林志津江

映画『はちみつ色のユン』(2012 年制作公開)は、幼い頃、韓国から国際養子としてベルギーに送られた Jung Henin 氏が成長後、自らの生い立ちを描いた漫画をもとに、当時撮られた動画や写真、そして韓国訪問時の映像を加えてつくられた作品である。自分が何者なのかを問う長い旅の末、産みの親と育ての親の双方へ感謝を表わし、またヨーロッパ人でもあるアジア人でもあるという、複合的なアイデンティティを素直に受け入れる境地へと至る。

今回、原作者で監督の Jung 氏が来日したのを機に、映画の上映と、Jung 氏自身を含めた関係者による学際トークセッションを、国際文化学部オープンセミナーとして開催した。

イベントは、立ち見が出るほどの大盛況で、日曜日にもかかわらず学生の姿もかなり見られた。これもひとえに、この映画の素晴らしさ、すなわち韓国で親から見捨てられ、養子としてベルギーで成長した Jung 氏の個人的な物語でありながら、同時にそれを超える普遍性を獲得しているがゆえであろう。作品を観ながら、きっと多くの参加者が自らに引きつけつつ、人間にとって家族とは、国や民族とは、アイデンティティとは、愛とは？と、思いを致したものと思われる。

映画上映後の学際トークでも、漫画（バンドデシネ）やアニメ表現の可能性、朝鮮民族の離散、韓国の国際養子の歴史など、多くの文脈からこの映画の背景が解説され、魅力が語られた。盛りだくさん過ぎて、会場の参加者との質疑応答に十分な時間が割けなかったのは残念だったが、その一部は懇親会の席で果たされた。

今回、この催しは、「朝鮮民族のディアスポラ」の観点からこの作品を授業で取り上げてきた高柳、「フランコフォニー」の立場からかねてより関心を注いできた廣松、そしてドイツの移民政策や韓国人移民の問題に以前から注目してきた林という、専門を異にする 3 人の専任教員が力を合わせて運営した。それ以外にも、本学卒業生で、この映画の日本紹介に尽力してきた Office H の伊藤裕美氏、そしてこの映画に惹かれた学外の多くの方々との協働により、実現が初めて可能になった。

学部の特長を活かして、今後とも学問分野を横断する、知的刺激に満ちた多文化のイベントを数多く開催していくべきであろう。今回の試みが、その際の一つのモデルケースになれば幸いである。

-
- 日時：2016 年 10 月 30 日（日）13:30～17:30
 - 会場：市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 3 階 BT0300 教室
 - 主催：『はちみつ色のユン』の友だちの輪＋法政大学国際文化学部
 - 内容：1. 映画『はちみつ色のユン』上映（75 分、日本語字幕版）
2. 学際トークセッション
 - ・ Jung Henin（映画『はちみつ色のユン』原作者・共同監督）
 - ・ 鵜野孝紀（漫画『はちみつ色のユン』翻訳者）
 - ・ 小出正志（東京造形大学教授、日本アニメーション学会会長）
 - ・ 清水知子（筑波大学人文社会系准教授、日本アニメーション学会機関誌編集委員）
 - ・ 平田由紀江（日本女子大学人間社会学部現代社会学科准教授、社会学・文化研究）
 - ・ 高柳俊男（法政大学国際文化学部教授、朝鮮近現代史研究）
 - ・ 廣松勲（法政大学国際文化学部専任講師、フランコフォニー文学研究）
-



学部所属交換留学生歓迎交流会のご報告

留学生受入・支援委員会

江村 裕文

2016年10月8日(土)に、恒例となっている国際文化学部主催の表記歓迎交流会が、富士見坂校舎食堂にて開催された。当日は朝からあいにくの天気の中、交換留学生15名、学部学生17名、教員3名が参加し、交流がおこなわれた。会自体は、学部学生の主導のもと、和気あいあいとした雰囲気のうちに進行した。

会の次第は、

Opening Ceremony 14:00から20分程度。学生のあいさつ、学部紹介。

Activities 14:20から15:40まで。書道の紹介。折り紙体験。浴衣の着付け。学生服や柔道着の試着等。同時に手巻き寿司等の軽食。およびフリー・トーク。

Closing Ceremony 16:00まで。教授会主任あいさつ。留学生一人一人のコメント紹介。

といったながれであった。

学部学生が時間ごとに移動しながら留学生全員と話し、その後、学部学生による日本文化の紹介が行われた。浴衣の着付け体験では学部学生が着付けを行い、浴衣を着た留学生は、その姿をそれぞれ写真におさめていた。書道体験では、慣れない筆に苦労しながらも、自分の名前を当て字にして挑戦し、書いた字に納得がいかに何度も書き直す留学生もいた。

今回で4回目となるこの会は、学部学生、今回は特に1年生が主体となって、7月8日(金)の第一回準備会以降準備が進められてきた。この歓迎交流会を企画した経験は、SAプログラム参加を控えたいい異文化体験の貴重な経験を積む時間であった。終了後もそこで連絡先を交換している姿が見られたが、今回の交流が一過性のものに終わらず、交流が続くことを期待している。

なお、今歓迎交流会はFICオープンセミナー(学部企画)として実施された。

アジアの市場経済移行国におけるガバナンス ー ベトナムとミャンマーの資源・エネルギー開発と 生活・文化・環境 ー

松本 悟

概要

近年、市場経済に移行したアジアの国々では、大規模な資源・エネルギー開発事業により経済発展が進められる一方で、住民の声が十分に反映されない開発が自然環境や住民の健康、生活が脅かしている。このような国々では、様々な利害関係者が、開発事業の決定や問題解決の過程に参加できるガバナンスが必要である。

この FIC オープンセミナーでは、日本からの援助、投資が集中しているベトナムとミャンマーの具体的な事例について、研究者と NGO から現地調査の結果が報告された。研究者、学生、NGO 関係者、企業関係者など約 40 名が出席し、日本のメディアでは経済発展や民間投資のプラスの側面に偏りがちな両国の草の根レベルで起きている問題に目を向け、研究者と NGO の双方の視点から今後の課題が提起された。

ベトナムのボーキサイト開発

ベトナムのボーキサイト埋蔵量は世界第三位とされており、その大部分は中南部高原（テイグエン地域）にある。採掘・アルミナ精算プロジェクトの建設は中国企業が請け負い、アルミナは主に中国に輸出されている。セミナーではダックノン省ニャンコーとラムドン省タンライのプロジェクトが例として取り上げられた。

ガバナンスをめぐる問題は 4 点ある。第一にベトナムの国会で審議されず、中越両共産党のトップ間で決められている点である。第二に説明責任の欠如である。具体的には計画が公開されておらず、移転や補償などについて住民が何も知らされていないことや、管轄官庁が現状と異なる説明をしたり、反対派知識人との議論を拒否したりしている点が挙げられる。第三に、住民が被害を訴えても企業も行政も対応していない点である。第四に都市部の反対派知識人らと地元住民の間にネットワークが作られておらず、議論はあるもののガバナンスの制度にはなっていない点である。

ベトナムのハイフォン第二石炭火力発電所

ベトナム北部ハイフォン第二石炭火力発電所から排出される粉塵が肺がんなど健康被害を生じさせていることがマスメディアで報じられていることを受けてトゥイグエン郡タムフン村を調査した。この石炭火力発電所は中国企業と丸紅によって施工された。

報告者の小高氏は、現地調査で聞いた肺がん患者の声や、毎日降り注ぐ粉塵の健康への

影響を懸念する声をセミナーで紹介した。粉塵が積もるのは夜間で、風の強い日は部屋の中に入ってくるという。近年この村では8～9人が肺がんで亡くなったそうである。

聞き取り調査の中で、設備が中国製だから公害をもたらすのだと信じている声があった。この問題を報じたジャーナリストのフェイスブックにも、中国政府（中国輸出入銀行）の融資による発言所建設とずさんな運営への批判が書かれている。別の報道によると、中国施工主が、入札後に人民元の下落分を請求したり、ベトナムの下請け企業の施工価格が高いと跳ね除けたり、支払いすらも極端な遅延となっているため途中で下請けを放棄するベトナム企業もある。

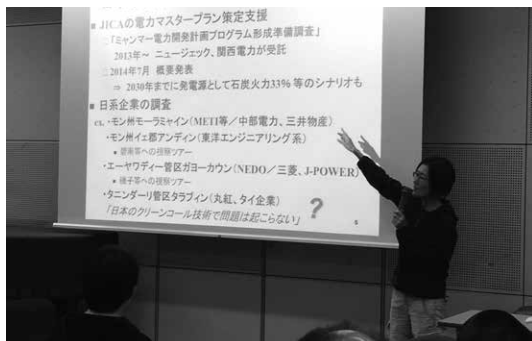
ベトナム南部ビントゥアン省のビンタン石炭火力発電所でも残滓が飛散して問題になるなど、ハイフォンで起きているような石炭火力発電所をめぐる環境問題は全国で起きている。

ミャンマーの日本企業による石炭火力発電所建設計画

民主化に伴い海外からの民間投資が急拡大するミャンマー南部で計画中の2つの石炭火力発電所がセミナーでは取り上げられた。1つはモン州のアンディン石炭火力発電所で、東洋エンジニアリングのタイの関連企業が投資をしており、日本の政府系金融機関や民間銀行が融資を検討していると報じられている。事業が健康・社会・環境に及ぼす深刻な悪影響を懸念する少数民族のモン族住民は、大規模な抗議集会を行う一方で、研究者やNGOなどの協力を得ながら自ら影響調査を実施し、コミュニティ活動や政府への申し入れを行っている。

もう1つはタニンダーリ管区のタラブウィン石炭火力発電所で、タイ国営企業の子会社や丸紅などが出資して計画している。カレン族とビルマ族で構成される地元住民は、健康・社会・環境への悪影響を懸念して事業に反対している。また、事業予定地はカレン民族同盟（KNU）の支配地域に位置しているため、民族紛争を助長する懸念も持たれている。

以上のように、本セミナーでは市場経済移行国であるベトナムとミャンマーにおいて、市民社会セクターが資源・エネルギー開発のガバナンスに及ぼす影響について具体的な調査事例が紹介された。セミナー参加者からは、それぞれの国の市民社会の動きや社会運動への関心が示されると同時に、中国や日本などの海外の投資企業の姿勢について疑問が投げかけられた。



《インティマシー》と《インテグリティー》 ——異文化理解のキーワード

衣笠 正晃

今回の講演会は、講師であるトマス・カスリス氏の著書 *Intimacy or Integrity: Philosophy and Cultural Difference* (2002) の日本語訳が『インティマシーあるいはインテグリティー——哲学と文化的差異』として本年7月に法政大学出版局より刊行されたことを受けて企画された。

カスリス氏は米国オハイオ州立大学で長年にわたって教鞭をとり、現在は同大学の特別名誉教授である。その専門領域は比較哲学・日本哲学、比較宗教学にわたり、著作には上掲書のほか *Zen Action/ Zen Person* (1989)、*Shinto: The Way Home* (2004) (邦訳：『神道』ちくま学芸文庫、2014 年)、*Japanese Philosophy: A Sourcebook* (2011) (共編著) などがある。また 2017 年には単著の日本哲学史 (*Engaging Japanese Philosophy: A Short History*) が刊行される予定である。

Intimacy and Integrity: Keys to Cross-cultural Understanding と題して英語でおこなわれた講演では、最初に文化的誤認 (cultural misrecognition) のあり方が最高裁判所大ホールにある圓鰐勝三による正義の女神像によって例示されるとともに、19 世紀末から現在にいたる文化理論の展開・変遷が概観された。つづいての本論では、まず文化の果たす役割が「前景化」(ゲシュタルトの提示) と「反復性」の 2 点に要約され、そこから異文化理解にあたっては「何が重要か」を考え直すこと、反復されるパターンを習得することが必要であると整理された。

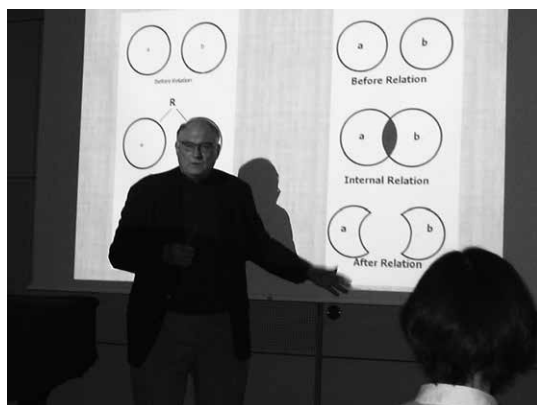
この (ミクロなレベルでの) パターンの理解に必要となるのが、外的関係を重視する「インテグリティー支配型文化」と、内的関係を重視する「インティマシー支配型文化」の区別である。この 2 種の関係性のあり方を図式によって説明しながら、カスリス氏はその応用例として「個人と国家の関係」「個人のアイデンティティー」「(詩的) 創造性」「倫理」を挙げ、たとえば「倫理」については、インテグリティー指向型の「責任 (responsibility) の倫理」とインティマシー指向型の「反応性 (responsiveness) の倫理」が対比できるとした。さらに氏は最初に引いた圓鰐作の正義の女神像の例に戻り、論理には両立しえないインティマシーとインテグリティーが、芸術的表象においては一つとなるとした。

最後に異文化体験が国際理解、学問領域、自己啓発などにもたらすものについての整理がおこなわれ、講演は結ばれた。

「インティマシー」と「インテグリティー」という指向性概念をめぐる抽象的な議論にカスリス氏自身の具体的な経験談が絡められた、熱のこもった講演であった。セミナー開催

日は平日で、開始時間も遅く、通訳なしの英語講演であったにもかかわらず、学内外から幅広い年代の聴講者を迎えることができた。講演後の質疑応答では、おりしも前日に結果の出た米大統領選の話題なども織り込まれ、現代社会のアクチュアルな問題に哲学あるいは人文学がどのように切り結ぶかについての実践の場となったのではないと思われる。抽象度の高い哲学的議論であるからこそ、「道具」としてさまざまな事柄に適用可能であり、また適用してほしい、というのがカスリス氏の希望であった。今回の講演が国際文化学部での学際的な研究・教育に何らかの実りをもたらしてくれることを、企画者として願う次第である。

-
- 日時：2016年11月10日（木）18：30～20：00
 - 会場：市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー3階 マルチメディアスタジオ
 - 講師：トマス・カスリス氏（オハイオ州立大学特別名誉教授）
 - 主催：法政大学国際文化学部
 - 協賛：一般財団法人 法政大学出版局
-



王様は裸だ 気鋭若手学者と SEALDs メンバーたちによる 大放談会

島田 雅彦

情報革命が進み、インターネットで情報が拡散、共有されることでネット民主主義が浸透してゆくかと思われたが、国家が情報管理を強化することで、民意は操作され、情報統制も行われるようになった。結果、ポピュリズムが広がり、思慮に欠けたリーダーが国の行く末を左右する事態になってしまった。有権者の政治的無関心、さらには愚民化がすすめば、民主主義も劣化の一途を辿る。その危険を避けるための保険であるはずの憲法もないがしろにされている。それに抵抗するには個々人が倫理観や公共心に則って、行動するしかない。

本来、大新聞やメジャー放送局が堂々と政権批判を行い、諸問題の論陣を広く張っていけば、言論は健全に機能するはずだが、すでに政府広報機関の様相を呈している。

自由な言論、多様な価値観を担保すべき教育機関にも同調圧力が高まっている中、私たちは民主主義を自分たちの手に取り戻さなければならない。いいたいことをいえず、権利主張も制限される状態に甘んじる必要はない。

2016年の参議院選挙から参政権が18歳まで引き下げられた。18歳から20代前半の若い有権者たちの学びの場である大学で、政治的覚醒を促すことは急務である。選挙とは、国会とは、立憲主義とは何か？気鋭の法学者、経済学者、SEALDsのメンバーを法政大学に招き、政治の現場で今起きていることを論じつつ、言論の自由を存分に行使する大放談を行い、学生、一般市民に投票行動を促そうとの意図からこの放談会を企画、実施した。

水上貴央氏からは、政権与党が憲法改正についての条文である九十六条に手をつけることで、改憲のハードルが下げられてしまうことの危惧が述べられ、森原康仁氏からはアベノミクスの失敗を裏付けるデータが示され、SEALDsの二人からは実際の選挙応援、改憲の強行採決反対運動を通じて、獲得した認識と手応えについての報告があった。また民主主義の危機は日本のみならず、世界的な現象にもなっており、外部の目から見た日本の状況を把握する必要もあるとの思いから、ヨーロッパにおける政治状況を大中一彌氏に報告してもらった。

-
- 日時 2016年6月29日 午後6時～9時
 - 場所 さったホール
 - 主催 法政大学国際文化学部

- 協力 憲法を考える法政大学教職員の会有志 集英社インターナショナル
- 講師 水上貴央（青山学院大学）、森原康仁（三重大学）、奥田愛基、寺田ともか（SEALDs）、中沢けい（本学文学部）、大中一彌、島田雅彦ほか

●スケジュール

開会挨拶

上記ゲストによるプレゼンテーション

大放談会 上記ゲストに加え、法政大学教員の飛び入り参加もあり。

裸だ

情報革命が進み、インターネットで情報が拡散。共有されることでネット民主主義が浸透してゆくかと思われたが、国家が情報管理を強化することで、民意は操作され、情報統制も行われるようになった。結果、ポピュリズムが広がり、思慮に欠けたリーダーが国の行く末を左右する事態になってしまった。有権者の政治的無関心。さらには愚民化がすすむれば、民主主義も変化の一途を辿る。その危険を避けるための保険であるはずの憲法も危うい。それに抵抗するには個々人が倫理観や公共心に則って行動するしかない。

本来、自由な言論、多様な価値観を担保する教育機関にも同調圧力が高まっている中、私たちは民主主義を自分たちの手に取り戻さなければならない。いいことをいえず、権利主張も制限される状態に甘んじる必要はない。

今夏の参議院選挙から改選権が廃まで引き下げられる。18歳から20代前半の若い有権者たちの争いの場である大学で、政治的覚醒を促すことは急務である。選挙とは、国会とは、立憲主義とは何か。気鋭の法学者、経済学者、SNDのメンバーを法政大学に招き、政治の現場で起こっていることを論じつつ、言論の自由を存分に行わせる大放談会を行う。学生、教職員に投票行動を促したい。


また民主主義の危機は日本のみならず世界的な現象にもなっており、外部の目から見た日本の状況を把握する必要もある。

2016年6月22日(水) 18:00
法政大学 国際文化学部 島田雅彦


大放談会

気鋭若手学者とSEALDsメンバーたちによる


講師・水上貴央（青山学院大学）、森原康仁（三重大学）、奥田愛基、寺田ともか（SEALDs）、大中一彌、中沢けい、島田雅彦（法政大学）




奥田愛基
(SEALDs、REDKARDS代表理事)




水上貴央
(青山学院大学法務研究科助教)



島田雅彦
(法政大学国際文化学部教授)



森原康仁
(三重大学人文学部法経済学系准教授)



法政大学 国際文化学部
日時：2016年6月29日 午後6時～9時
場所：最上ホール（法政大学最上キャンパス内・外堀校舎6階）
<http://www.hosei.ac.jp/access/ichigaya.html>
主催：法政大学国際文化情報学会
協力：憲法を考える法政大学教職員の会有志

シンポジウム「イースター蜂起—100年」

北 文美子

法政大学国際文化学部と日本アイルランド協会が共催となり、アイルランドで起こったイースター蜂起から100年を経た本年、イースター蜂起を多角的な視点から問い直すシンポジウムを開催した。

初日の国際シンポジウム“The influence of the Easter Rising on Political Developments in East Asia”ではイースター蜂起とアジアの政治的状況を歴史的に考察した。同シンポジウムはアイルランド政府助成金(The Ireland 2016 Fund)の後援を受け、北アイルランド Queen's University of Belfast から中国近代史を専門とする Aglaia De Angeli 氏を招聘した。また法政大学から2名が分担研究者として関わっている科学研究費助成金研究プロジェクト「日本におけるアイルランド認識と植民地統治：アイルランドと朝鮮からの視点を交えて」（基盤研究B）の研究成果も併せて発表された。

二日目の研究発表ならびにシンポジウムでは、イースター蜂起がいかに歴史的に記憶されることになったかを歴史・文学・文化など分野ごとにその表象が論じられた。また、アイルランド共和国、北アイルランドというアイルランドの島が抱える地政的な影響についても発表がなされた。

二日間のべ100名を超える参加者があり、活発な議論が交わされた。

●日時 2016年12月10日（土）13：30～17：30

12月11日（日） 9：30～17：00

●場所 法政大学田町校舎5階マルチメディアホール

●主催 法政大学国際文化学部、日本アイルランド協会

●協力 アイルランド外務省

●プログラム

12月10日

国際シンポジウム（使用言語 英語）

International Symposium

“The influence of the Easter Rising on Political Developments in East Asia”

基調報告 後藤浩子（法政大学経済学部）

パネルディスカッション

Aglaia De Angeli(Queen's University Belfast) ‘A Republic for China and Ireland:

A New Beginning’

愼 蒼宇（法政大学社会学部）'A Consideration of the Easter Rising and the Korean Nationalist Movements of the Same Period in Terms of Thought, Sentiment and the Movement themselves'
Peter O'Connor（武蔵野大学）'Britain's Korea, Japan's Ireland?: The East on Easter 1916 and the Aftermath of the Rising'

12月11日

研究発表

水崎野里子（大東文化大学）「W.B. イェイツのブランクヴァースと日本和歌の翻訳」
八幡雅彦（別府大学短期大学部）「『絶望の中のユーモア』—ジョージ・A・バーミングガムの
第一次大戦回想録と短編小説」

山田朋美（津田塾大学）「日本の朝鮮統治と『ショー事件』」
河島一仁（立命館大学）「ダブリンにおける野外博物館構想—ウェールズならびに
北アイルランドとの比較をもとに」
Brian Sayers（目白大学）'Easter 1916 and the Fenian Ideal'（使用言語 英語）

シンポジウム「イースター蜂起——100年を経た今」
森ありさ（日本大学）「イースター蜂起と世界大戦—メモレーションをめぐる諸問題」
伊達直之（青山学院大学）「文学者が見たイースター蜂起」
三神弘子（早稲田大学）「イースター蜂起以外の1916年」
佐藤亨（青山学院大学）「北アイルランドと1916年」
